

2011年8月3日

抗がん剤の共同研究開発と商業化に関する契約の変更

～ 非臨床・初期臨床試験の共同実施の対象に「PR610」を追加 ～

プロアクタ社（最高経営責任者：John C. Gutheil）と株式会社ヤクルト本社（社長：根岸孝成）は、本年2月に締結した、がん治療薬のための低酸素活性型プロドラッグ（低酸素状態で活性型に変換される化合物）「PR509」の共同研究開発と商業化に関する契約（原契約）に、プロアクタ社が保有し、「PR509」と同様の効果が期待できる低酸素活性型プロドラッグ「PR610」を含むよう内容を変更しました。原契約では、㈱ヤクルト本社は、日本における「PR509」の研究、開発および商業化する権利を付与されています。

【PR509およびPR610について】

PR509およびPR610は、ニュージーランドにあるオークランド大学のオークランドがん研究所で発見された、プロアクタ社が所有する低酸素活性型の不可逆的なマルチキナーゼ阻害剤（複数のリン酸化酵素の阻害剤）です。

現在、様々ながんの治療に際して、可逆的なマルチキナーゼ阻害剤が使用されていますが、薬剤耐性がしばしば発現します。また、副作用によって高用量の使用が制限される場合があります。

PR509およびPR610は、大部分の固形がんで見られる、極めて低酸素な状態でのみ活性型に変換される低酸素活性型であることから、その活性型の濃度が、がん細胞で高濃度となります。このため、有効性が改善され副作用が軽減されることが示唆されています。また、これらの薬剤の作用は不可逆的であることから、可逆的な阻害剤で見られる薬剤耐性を回避することができると期待されます。

なお、PR509およびPR610は、可逆的なチロシンキナーゼ阻害剤であるエルロチニブやゲフィチニブ耐性の非小細胞肺癌に対する開発を当面の目標としております。エルロチニブやゲフィチニブ耐性の非小細胞肺癌における効果的な抗がん剤治療は未だ確立されていません。プロアクタ社は、将来的には、これらの薬剤について非小細胞肺癌に加えて、胃がん、乳がん、膵臓がんのような他のがんについても検討を行う予定です。

【プロアクタ社のコメント】

プロアクタ社の最高経営責任者である John C. Gutheil 氏は、「直近の非臨床試験結果に基づいて、我々は、PR610が臨床試験においても優れた効果を示すと考えています。我々は、(株)ヤクルト本社との短期間の提携で、強固な関係を築いています。我々は、(株)ヤクルト本社がPR610に興味を示し、PR610の可能性について(株)ヤクルト本社と我々が前向きな考えを共有していることを喜ばしく思います。」とコメントしています。

【(株)ヤクルト本社のコメント】

(株)ヤクルト本社の取締役常務執行役員・医薬品本部長の阪本重善は、「我々は、PR610を含むように共同開発および商業化に関する契約を変更したことを嬉しく思います。今回の契約変更は、我々に、プロアクタ社が持つ、がん治療のための低酸素活性型不可逆的マルチキナーゼ阻害剤ポートフォリオにおける2つの有望な化合物についてオプションを付与してくれます。我々は、がんに苦しむ患者さんに新たな治療法を早期に提供するために、本プログラムの開発を続けることを楽しみにしています。」とコメントしています。

【プロアクタ社について】

プロアクタ社は、サンディエゴ市に拠点を置く、低酸素活性型抗がん剤の開発、商業化に特化しているバイオテクノロジー企業です。プロアクタ社は、現在、再発・難治性の白血病患者に対し、低酸素活性型アルキル化剤であるPR104の第二相臨床試験を行っています。加えて、プロアクタ社は、ニュージーランドのオークランド大学からライセンスされたがん治療のための低酸素活性型プロドラッグのパイプラインを持っています。プロアクタ社の更なる情報は、プロアクタ社の[ウェブサイト](#)をご覧ください。

【(株)ヤクルト本社について】

ヤクルト本社は、医薬品、飲料・食品、化粧品の開発・販売を行う日本企業です。医薬品事業においては、がん領域での強固な地位を確立しています。ヤクルト本社に関する更なる情報は、[ウェブサイト](#)または[会社概要](#)をご覧ください。

以上